

## 第3回“京都をつなぐ無形文化遺産”審査会次第

日時：平成30年1月26日(金)  
10:00～12:00  
場所：職員会館かもがわ

### 1 開会

### 2 挨拶

### 3 議事

- ・“京都をつなぐ無形文化遺産”「京の年中行事」の最終検討

### 4 閉会

#### 【配布資料】

①次 第

②名 簿

③配席図

④資 料 選定案

(参考資料1) 第2回審査会摘録

(参考資料2) アンケート結果

## “京都をつなぐ無形文化遺産”審査会委員名簿

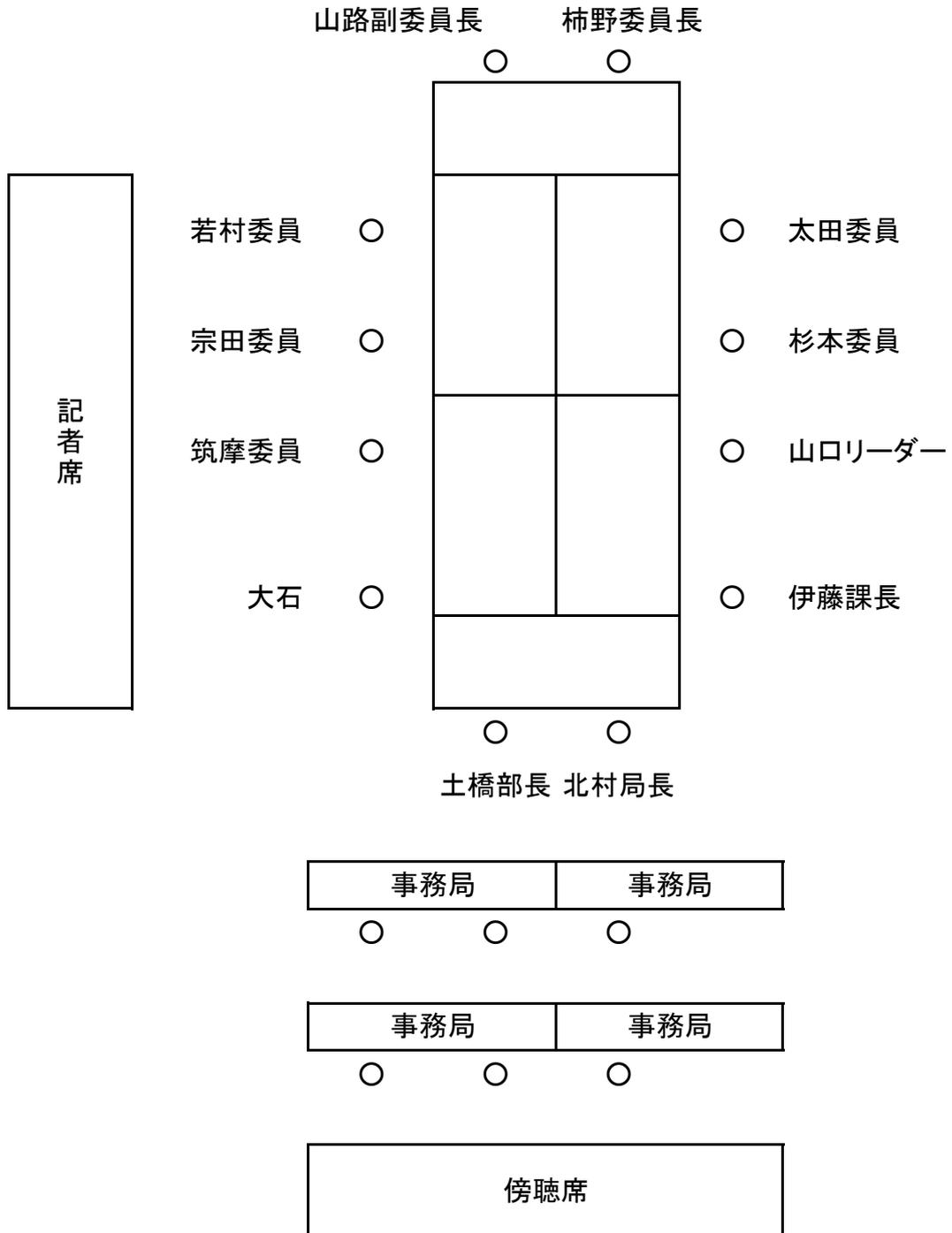
(五十音順, 敬称略)

	氏 名	肩 書
委員	太田 達	(公財) 有斐斎弘道館代表理事
委員長	柿野 欽吾	京都産業大学理事長
委員	杉本 歌子	(公財) 奈良屋記念杉本家保存会学芸部長
委員	鈴鹿 可奈子	(株) 聖護院八ッ橋総本店専務取締役
委員	筑摩 寿	市民公募委員
委員	宗田 好史	京都府立大学副学長・京都和食文化研究センター長
委員	山路 興造	京都市文化財保護審議会委員
委員	若村 亮	(株) らくたび代表取締役
オブザーバー	山口 壮八	文化庁地域文化創生本部 暮らしの文化・アートグループリーダー

# 第3回京都をつなぐ無形文化遺産審査会配席図

日時:平成30年1月26日(金)10:00~12:00

場所:職員会館かもがわ大多目的室



# 京都をつなぐ無形文化遺産

## 京の年中行事

～季節・暮らし・まちを彩る生活文化～

(案)

### 目次

【選定にあたって】 .....	1
【京都を彩る年中行事】 .....	3
1 季節を彩る年中行事 .....	3
2 暮らし・まちを彩る年中行事 .....	4
【移り行く年中行事】 .....	6
1 改暦と年中行事 .....	6
2 生活の変化と年中行事 .....	6
【京の年中行事の例】 .....	8

## 【選定にあたって】

年中行事とは、毎年特定の時期に、家庭や地域などで繰り返される伝統行事のことで、神仏や自然に対する畏怖や感謝、先祖を敬い、故人をしのぶ心、子どもの健全な成長を願う思い、子孫に思いを致す心、生業や生活の向上を祈る気持ちなどを契機に生まれた。

年中行事には、お盆など日本の民俗に根差したもの、五節句など中国から伝わったもの、祭礼に伴うものなどがあり、それぞれにまつわる食べ物やしつらい、しきたりなどを伴いながら、暮らしの中で育まれてきた。

とりわけ千年の都・京都では、庶民が公家や武家、僧侶、神職などと交わった歴史が長く、加えて、商工業の発達により、扇屋や織物業など同業者の集住が促され、同業者同士のつながりが密接になったことから、独自の行事やしきたりが日常生活に定着し、豊かな生活文化が育まれてきた。

正月や五節句のように公家や武家の儀式からきているものや、節分や彼岸のように暮らしに深くかかわるざっせつ雑節から生まれたものなど、様々な年中行事に彩られる暮らしの中、人々は、普段通りの日常を「ケ」の日、祭礼や年中行事などを行う日を「ハレ」の日と呼び、単調になりがちな生活にリズムをつけてきた。

日々の暮らしの中で、楽しみや安らぎをもたらしてきた年中行事は、無病息災を祈り、神仏や自然への畏敬の念を深めることを通じて人々の心を豊かにするとともに、家族とのふれあいを深め、さらに、地域コミュニティの活性化、地域経済・ものづくりの継承・発展にも役立っている。

このように人々の生活に欠かせない年中行事は、時代の変化に応じ、形を変えながらも大切に受け継がれてきた。太陽暦へ改暦された明治初期以降、年中行事の実施時期に混乱が生じた時期もあったが、人々は様々な工夫をしながら年中行事をつないできた。

現在、効率性、利便性を追求する生活スタイルや核家族化、地域におけるつながりの希薄化などにより、年中行事は衰退、或いは、簡素化されるなど、大きく変化

している。

また、きものなど我が国独自の衣装やその装飾品をはじめとする京都の伝統的工芸品は、年中行事と密接に結びついており、年中行事の継承は伝統産業の存続にも関わっている。

先人が長い歴史の中で培ってきた生活文化は、現代に生きる私たちが次の世代に伝えていかなければならないものであるが、同時に、時代とともに移ろう暮らしの中で変化していくものでもある。

年中行事についても、形だけではなく、行事本来の意味、それらの中に込められた先人の思いや知恵を引き継いでいくことが重要であり、現代において実施できるものは実施し、なじまないものは今の生活に合った形を変えていく、そういう柔軟な方法で年中行事を守り、伝えていくことが大切であり、そのことが伝統的な生活文化の継承につながっていくものである。

生活文化は、歴史や風土の中で受け継がれ、広く日常的に親しまれてきたものであり、我が国の文化を語る上で不可欠なものとして、一層の振興を図ることが重要となっている。平成29年6月には、文化芸術基本法が施行され、食文化をはじめ生活文化の振興を図ることが明文化された。また、文化庁の京都への全面的移転に伴い、生活文化等の新分野へ政策対象を拡大する方針が掲げられている。

京都市では、世代を越えて大切に受け継がれてきた生活文化を継承していくため、平成25年4月、「京都をつなぐ無形文化遺産」制度を創設し、これまで「京の食文化」「京・花街の文化」「京の地蔵盆」「京のきもの文化」「京の菓子文化」を「京都をつなぐ無形文化遺産」に選定してきた。そして、私たちは、移り行く季節の中で行われる様々な行事の際にこれらの文化に触れ、その体験を通じて伝統的な生活文化を継承していく意義を強く認識することができる。

こうした状況を踏まえ、伝統文化に親しみ、生活文化を継承していく機会となっている年中行事の価値を見つめ直し、継承していく大切さを再認識するとともに、その意義を広く市民に発信していくため、「京の年中行事～季節・暮らし・まちを彩る生活文化～」を「京都をつなぐ無形文化遺産」に選定する。

## 【京都を彩る年中行事】

### 1 季節を彩る年中行事

私たちの暮らしを彩る年中行事の代表的なものに「節句」がある。「節」は季節の節目を意味し、「節句」とは、季節の節目に、無病息災、豊作、子孫繁栄などを願い、お供え物をしたり、邪気を祓う行事のことで、「節供」ともいう。

人日<sup>じんじつ</sup>(1月7日)、上巳<sup>じょうし</sup>(3月3日)、端午<sup>たんご</sup>(5月5日)、七夕<sup>たなばた</sup>(7月7日)、重陽<sup>ちょうよう</sup>(9月9日)の5つを**五節句**※といい、古代中国では、奇数(陽)の重なる日は、めでたい反面、陰に転じやすいとされ、邪気を払う行事が行われてきた。

こうした中国の暦法と風習が日本に伝わると、日本古来の儀礼や祭礼などと結びつき、宮中で邪気を祓う行事が催されるようになった。

当初は宮中や貴族社会で行われていたが、江戸時代に「五節供」が式日(現在の祝日)に制定されてから、民間に広がっていった。明治になって「五節供」は廃止されたが、今でも私たちの暮らしの中に定着している。

五節句のほかに季節の節目として**二十四節気**がある。太陽の黄道上<sup>こうどう</sup>の視位置によって15度ごとに24等分し、約15日ごとに分けた季節のことである。1年の長さが12の「中気」と12の「節気」に分類され、**立春**や**秋分**、**冬至**など、季節を表す名前がつけられている。

古代中国では、月の満ち欠けに基づいた太陰暦が使われていたが、太陰暦は太陽の位置と無関係なため季節の間にズレが生じていた。農作業などでは春夏秋冬の季節を正しく知る必要があるため、中国の戦国時代に太陽の動きを基に二十四節気<sup>せつぎ</sup>が考案され、日本では江戸時代の暦から使われている。とりわけ三方を緑豊かな山々に囲まれ、鮮やかに季節が移ろう京都では、二十四節気によって、豊かな自然を暮らしに織り込み、共に生きる暮らしの文化を培ってきた。

二十四節気のほか、**節分**や**彼岸**など、季節の移り変わりを表す**雑節**がある。これは生活や農作業に照らし合わせてつくられた日本独自のもので、いまでも暮らしの中に溶け込んでいる。

## ※五節句

人日：古代中国では、正月元旦は鶏、2日は狗（犬）、3日は羊、4日は猪、5日は牛、6日は馬、7日は人の日として、それぞれの吉凶を占い、7日の人の日には邪気を祓うために、七草の入った粥を食べ、一年の無病息災を祈ったとされる。

上巳：古代中国では、上巳の日に、川で身を清め、不浄を祓った後に宴を催す習慣があった。一方、日本の貴族社会では、「雛遊び」というものがあり、両方の習慣が結びついて、男女一対の「ひな人形」に子どもの幸せを託し、ひな人形に厄を引き受けてもらい、健やかな成長を願うようになった。なお、京都では、古式に倣い、男雛を向かって右、女雛をその左に並べるのがならわしとされる。

端午：中国では、この時期は雨季にあたり、盛りを迎える香り高い菖蒲や蓬が邪気を祓うとされたことから、蓬で作った人形を軒に飾ったり、菖蒲酒を飲んだり、菖蒲湯に浸かって邪気祓いをしていた。平安時代に宮中に取り入れられ、江戸時代になると、菖蒲が武を尊ぶ尚武に通じることから、武家の行事となり、さらに男児の健やかな成育を祝う行事へと発展した。

七夕：中国に古くから伝わる、牽牛星（わし座のアルタイル）、織女星（こと座のベガ）の伝説に基づいた星祭りの説話と日本古来の農耕儀礼や祖霊信仰と結びついたと言われる。竹竿に糸をかけて裁縫や習字の上達を星に祈るとかなえられるという、中国の乞巧奠の習わしがあり、平安貴族たちが、これをまねて、梶の葉に歌を書いたのが始まりとされ、京都の旧家ではその伝統が残っている。

重陽：「九」という陽の数が重なることから重陽という。中国では奇数を陽の数とし、陽の極である9が重なる9月9日は大変めでたい日とされ、菊酒を飲んだりして邪気を払い長命を願うという風習があった。平安時代の初めに日本に伝わり、宮中では観菊の宴が催された。日本独自の風習に「菊の着綿」があるが、平安時代から宮中で営まれたもので、重陽の節句前夜、菊の花の上に真綿をかぶせると翌朝には夜露と菊の香りが染み込み、その真綿で身体を祓い無病息災と不老長寿を願ったのもので、京都を中心に伝承されてきた。

## 2 暮らし・まちを彩る年中行事

京都には、五節句や二十四節気、雑節にまつわる行事のほか、一年を通じ、家庭や地域、社寺など、まちのいたるところで様々な年中行事が行われている。いずれの行事にも深い意味があり、人それぞれに願いを込めて行事に参加する。

1年が始まる正月には、過ぎ去った年の災厄を祓い、新たな年の幸せを願う。旧暦の年越しとなる節分には、豆まきをして厄を祓い、社寺ではその起源とさ

れる<sup>ついな</sup>追儺という鬼祓いの儀式が、花街ではお化けという仮装の風習が行われる。6月と12月の末日には、半年の厄を祓い、次の半年を無病息災で過ごせるように祈願する<sup>おおはらえ</sup>大祓がある。

京都の代表的な祭りである祇園祭は、京都をはじめ日本各地に疫病が流行したとき、災厄の除去を祈った御霊会を起源とする。また、数多くの大火を経験した京都では火伏せ信仰が広がり、7月晦日夜から翌朝にかけての愛宕山は千日分の功德があるとされる千日詣を行う参拝者で賑わう。一方、太陽の光が最も弱くなる冬至の頃になると、古代から続く太陽復活の行事とされ、無病息災などを祈るお火焚きが町々や各神社で行われる。

春秋の彼岸に先祖の霊を供養するとともに、盆には先祖の霊をお迎えし供養した後、庭先などで送り火を焚いて、あるいは五山の送り火に手を合わせて先祖の霊を送り、冥福と家内の無病息災を祈る。盆が過ぎると子どもの健全な育成と町内安全を願って各町内で地蔵盆が行われる。子どもの健やかな成長を祈る行事としては、七五三のほか、京都独特の行事として十三詣りがある。十三詣りとは、数え年13の子どもが智恵と福德を授かりに参詣することで、帰路の渡月橋で振り返ると、授かった智恵を失うと伝わる。

京都の各社寺では、五穀豊穰や天下泰平を祈願する行事や、神道、仏教の教えに由来する行事が年間を通じて行われており、氏子や檀家だけでなく、市民や観光客にも親しまれている行事も多い。五穀豊穰を祈願したことに始まり、平安時代に勅祭となった葵祭は、祭儀のひとつである路頭の儀で多くの観客を魅了し、平安京遷都千百年の奉祝行事として始められた時代祭は、風俗行列で京都の歴史をしのばせる。また、社寺の祭神や開祖の縁日には、天神さんや弘法さんのように、境内や門前で市が開かれることがあり、多くの参拝者で賑わう。茶道文化と結びつき、献茶祭などの祭事が催されることもある。

人々はこうした年中行事に参加し、家族や友人、地域の人々と毎年同じ時期に同じような経験を共有することで、家族や地域などの絆を深め、それぞれの人生を豊かにしていると言える。

## 【移り行く年中行事】

### 1 改暦と年中行事

明治5年（1872）にいわゆる明治改暦が行われた。旧暦または陰暦と呼ばれる、太陰太陽暦（太陰暦を基とするが、太陽の動きも参考にして閏月を入れ、月日を定める暦法のこと）に替わって、太陽暦が採用された。

旧暦からの伝統を、新暦のなかでどう行っていくのかは、年中行事にとって大きなテーマであり、葛藤が続いたが、いろいろな工夫を重ねた結果が現在の年中行事である。

具体的には、新暦への移行により、季節が約1か月早くなるため、年中行事が本来の季節からずれてしまい、その時期に行う意味が薄れてしまうものが多数存在した。そこで、暦の上での日付を1か月遅らせることにより、旧暦の時代の季節から大きくずれないようにする方法、つまり月遅れとしたものが多い。月遅れの代表的なものにお盆があり、旧暦7月15日のお盆は、京都でも月遅れの8月15日に行われる。

一方、五節句などの日付に意義がある行事では月遅れはほとんど採用されず、時期が大きくずれた状態になっている。端午にちなむこいのぼりは、元々梅雨の季節である旧暦5月、雨中で鯉が天に昇って竜になること（登竜門）にあやかっ、江戸時代に武士の子弟の出世を願って掲げたものであった。また、七夕は元々梅雨明け後の旧暦7月7日に行うものであり、お盆直前の行事であった。新暦では、梅雨の季節となり、天の川を眺めるには不向きな時期にあたる。なお、京都では旧暦7月7日にあたる8月に「京の七夕」が市内各地で行われ、いまでは夏の風物詩として定着している。

### 2 生活の変化と年中行事

生活の洋式化などライフスタイルの変化は、年中行事の有り様に影響を与えている。

例えば、町家では、旧暦の6月1日に**建具替え**を行う風習がある。建具替えとは、身の厄や災いを祓う夏越の祓の一環として、住まいの塵や埃を清め、建具は夏用のよしど芦戸に替えることであり、軒先にすだれ簾やよしず葦簀を吊るし、座敷にはとのしろ籐筵を敷き詰めるなどして、夏のしつらえに整える。しかし、町家が現代的な建築物に建て替わっていくのに伴い、年中行事としての建具替えも減少している。

また、地蔵菩薩の縁日（毎月24日）にちなむ**地藏盆**は、現在は人が集まりやすい8月中下旬の土日を中心に行われることが多い。子どもの減少や職住分離をはじめとする生活様式の変化などにより、行事自体が簡略化・衰退しているところも増えてきており、社会の変化によって年中行事の有り様が大きく影響を受けている例と言える。

私たちの生活を支える産業と年中行事の結びつきも強い。

例えば、年末になると京都の店舗には、**正月の雑煮**をつくるための白味噌や丸餅、えび芋などが所狭しと並び、6月末には菓子屋の店頭の**水無月**が、**夏越の祓**の時季を告げる。地域特有の行事で用いる食物や用具などは、その地域の店舗が特別に誂えている場合も少なくない。

また、産業面の需要から変化する年中行事もある。京都発祥ではないが、**節分に恵方巻き**を食べる風習は、産業界が仕掛けた節分の行事として有名である。京都では、鴨川の**納涼床**が一例で、江戸時代には、祇園祭の先の神輿洗いの翌日から後の神輿洗いの前日まで（旧暦6月1日から17日まで）という決まりがあった。これは、その間は鴨川の神が神輿にのって不在となるため、川床で飲食してもいいという考えが背景となっているが、いまでは、観光客のニーズの高まりもあり、5月から9月まで設けられている。

季節とともに一年を彩る年中行事は、人々の暮らしに寄り添いながら時代とともに変遷しているのである。

## 【京の年中行事の例】

京都をつなぐ無形文化遺産審査会及び市民の皆様からいただいた御意見

項目	行事例	
五節句	じんじつ 人日 じょうし 上巳  たんご 端午  たなばた (しちせき) 七夕  ちょうよう 重陽	七草粥 ひなまつり (ひな人形, 桃の花, ちらし寿司, ひちぎり 引千切, ひなあられ) しょうぶ 菖蒲酒, 菖蒲湯, 五月人形, 柏餅, ちまき, こいのぼり 梶の葉に歌を書く, 笹飾り, 乞巧奠 きつこうでん 着綿 .....
季節を彩る	節分 春 土用の丑の日 十五夜 冬至	豆まき, 終鰯, 恵方巻, 追儺式, お化け ひいらぎいわし ついなしき 花見 うなぎを食べる 月見, すずき, 月見団子 かぼちゃを食べる, 柚子湯 .....
先祖を供養する	盆  彼岸	迎え火, 六道まいり, 五山送り火, 盆棚, 施餓鬼 ろくどう せがき 盆踊り 墓参り .....
町内, 暮らしを守る	初午の日 6/30 7/31 8/24 頃  8/28 頃 亥の月亥の日 11 月頃 12 月頃	はつうま 初午詣 (布袋さんの人形を飾る) なごし はらえ 夏越の祓 (茅の輪くぐり, 水無月) 愛宕千日詣 (護符は台所に貼る) 地蔵盆 (地蔵を飾る, 数珠回し, ふごおろし, 菓子をもろう) 大日盆 い こ 亥の子 (亥の子餅, 囲炉裏や炬燵に火を入れる) こたつ お火焚き ひ た き だいこ だ 大根焚き .....
子どもの成長を願う	11/15 4/13 成人の日	七五三 十三まいり 成人式 .....

<p>年未年始</p>	<p>年末 大晦日 正月  小正月 年始</p>	<p>事始め, 餅つき, 終い縁日, 御用納め をけら詣り, 除夜の鐘, 年越しそば 初詣, 根引き松, 門松, お年玉, 書初め 白味噌丸餅の雑煮, おせち料理, 恵方棚, 皇服茶<small>おうぶくちや</small> しめ縄, 餅花 左義長<small>さぎちやう</small> (どんど), 小豆粥, ぜんざい 事納め, 初縁日, 初釜, 御用始め .....</p>
<p>祭りなどの行事</p>	<p>1月 2/23 2/24 2/25 4/8 4月第二日曜 5月 7月 7月第三日曜 土用の丑の日頃 8/4 秋分 10月 10月第二土曜 10/22 10/22 11/23 11/23~11/25 12/1等</p>	<p>修正会<small>しゆしやうえ</small> 五大力さん<small>ごだいき</small> 幸在祭<small>さんやれ</small> 梅花祭 花まつり やすらい祭り 葵祭 祇園祭 御田祭<small>おんだ</small> 御手洗祭<small>みたらし</small> 北野祭 清明祭<small>せいめい</small> ずいき祭 春日祭 時代祭 鞍馬火祭<small>くらまひまつり</small> 新嘗祭<small>にいなめ</small> 献菓祭 献茶祭 (祭りの日に鯖寿司を食べる) .....</p>
<p>芸能とつながる</p>	<p>春, 秋  春, 秋等 6/1~6/2 8/9~8/31 11/30~12月末 12月</p>	<p>五花街のおどり<small>かがい</small> (都をどり, 京おどり, 鴨川をどり, 北野をどり, 祇園をどり など) 大念仏狂言 京都薪能<small>たきぎのう</small> 六斎念仏<small>ろくさい</small> 吉例顔見世興行 能楽大連吟 .....</p>

市民が集う	7月頃 夏 8/7~8/10 8月等 体育の日等 11/3~11/4 12/13~12/14 毎月16日 毎月21日 毎月25日 毎月29日	納涼床 ラジオ体操 陶器まつり 古本市 区民運動会 洛趣会 京料理展示大会 いちろく市 弘法市 天神市 醍醐市 .....
思いを伝える	2/14 5月第2日曜 6月第3日曜 7月 8/1 9月第3日曜 12月	バレンタインデー 母の日 父の日 中元 はっさく 八朔 敬老の日 歳暮 .....
暮らしを楽しむ	6月, 9月頃 6/1, 10/1頃 11/15 年末 毎月16日	建具替え 衣替え きもの日 年末大掃除 DO YOU KYOTO?デー .....
ともに祝う	1月 12/25 各々	新年互礼会, 新年会 クリスマス 誕生日, 結婚記念日 .....

## 第 2 回“京都をつなぐ無形文化遺産”「京の年中行事」審査会摘録

日 時：平成29年10月31日（火）午前10時00分～正午

場 所：旧三井家下鴨別邸

出 席：柿野欽吾委員長，山路興造副委員長，太田達委員，杉本歌子委員，鈴鹿可奈子委員，筑摩寿委員，若村亮委員，山口壮八オブザーバー，（欠席：宗田好史委員）

1. 開 会
2. 挨 拶
3. 制度説明（事務局）

資料：「京の年中行事に関する」アンケート結果，「京の年中行事」の選定にあたって，京都を彩る年中行事，普及啓発冊子「京の年中行事」（案），選定までのスケジュール。

参考資料：市民への年中行事アンケートの結果，第1回審査会摘録

4. 議 事

（年中行事の読み方について）

柿野委員長：前回，議論に挙がった「年中行事」とは，「ねんちゅう」か「ねんじゅう」かという点について。

北村局長：事務局より調べた結果を報告したい。どちらが間違いというのではない。

大石係長：辞書などでは併記をされていて，例えば国語辞典では「ねんちゅう行事」と見出しを立てているものが多いが，歴史辞典，百科事典などでは「ねんじゅう行事」と見出しに立てているものがどちらかと言うと多い。また，NHKでは「ねんじゅう行事」を第一の読みにして，「ねんちゅう行事」を第二の読みにしている。両方使用するが，「ねんじゅう行事」を優先的に使っている。宮中の行事など，平安時代や鎌倉時代の「年中行事絵巻」や「年中行事秘抄」，こういった文献の読み方については「ねんちゅう行事」は使わずに「ねんじゅう行事」を用いる。結局，どちらも使うというのが最終的な結論。京の年中行事に関しては併用，どちらでもよいとする。

（旧暦・新暦と季節感について）

山路副委員長：先週の金曜日，香港の友人に電話すると「今日は休日です」と言うので，「何の休日だ」と聞くと，「重陽です」と言われた。この休日は旧暦の9月9日。香港，韓国，中国は，まだ旧暦でやっている。韓国は別だが，自分のところで作った年中行事だから，自分のところに新暦が入ってきても，年中行事は今でも春節，正月も含めて，変わらずに旧暦でやって

いる。

日本の場合、基本的に奈良時代に中国から年中行事が入ってきた。要するに借り物の行事。そのため日本の場合は明治6年から、新暦が入ってきて100年かけてほしい旧暦はなくなってしまった。地域で生まれた年中行事と、借り物の年中行事とがそこで分かれてしまう。結局、日本では大部分は中国から来たものであるから、1箇月遅れにするなどしてどうにか季節に合わせている。

日本の旧暦の重陽という、先週の金曜日で基本的に重陽は寒い時期。日本の旧暦でやっていた頃の重陽の節句は9月8日に河原者や庭者たちが貴族の館に菊を植え替えて、女官たちが菊の上に着綿（きせわた）という真綿を9月8日の夜に着せていき、9月9日の朝にその真綿を外して、そこに降りた露で貴人たちの体を拭く。それが重陽の節句の、日本における重要な宮中行事の基本だった。女官たちは着綿を入れる丸い塗りの道具を必ず持っていた。

このように季節感というものが非常に重要であった旧暦の年中行事。季節に伴って行われていたものが、中国から輸入して日本化した年中行事の本質。京都の年中行事を考えた場合、一番根底にあるのは、京都盆地の季節の移ろいだと思う。千年の間、暦がどう変わろうと、京都の盆地の中における自然の移り変わりは変わっていない。京都の人たちの生活の中に染み込んでいる1年の行事というものは、季節の移ろいを大切にしたい行事ということが根底にはあるのではないか。中国から渡ってきた行事も、旧暦でやっていたら中国と日本は似ているからほしい同じように受け入れられたが、ヨーロッパと同じように新暦になったら合わなくなった。1箇月遅れで季節感に合わせてようと工夫もしてきた。

もし京都以外の都市、例えば奈良が都であれば、年中行事は変わっていたと思う。やはり三方を山に囲まれて、非常に夏が飛び抜けて暑くて、冬が飛び抜けて寒くて、その代わり春と秋が飛び抜けて桜やモミジが美しいという、季節の移ろいが非常にはっきりしているこの京都盆地の中で日本の年中行事が育ったということが、京都の年中行事を考えたときに一番根底にあるものだと思う。その肌感というものを元にして年中行事ができているということを伝えていきたい。

太田委員：重陽の節句というのはわりと市民には関係ない行事だが、その中で一番市民に近いのは着綿というお菓子。食べ物としての着綿は40、50年前からあった物だが、東京や大阪のデパートが新暦の9月9日に用意してくれと言ってきたときには「新暦の時期には露が降りないので、旧暦でないと作らない」と断っていた。

山路副委員長：旧暦の9月9日は昼間の温度と夜の温度とが非常にあるので、露がものすごく降る。

太田委員：市民生活の中で京都的というので表現できると思う。ただ、神社の行事には最近始まったの

もあって、菊酒は最近のもの。

山路副委員長：何かつくられた京都という感じがしている。

(表面化しない行事について)

山路副委員長：このごろ文化庁をはじめ、経済産業省の組織などいろいろな所も、目に見えた祭りであるとか、人々が目で見て喜ぶ行事を持ち上げるというのが観光を含め全国的に行われている。文化財が歴史的な重要性よりも、もっぱら公開して人気のあるものの方に移って行って、文化財保護法が変えられるなんて話も出てきている。京都の年中行事を考える場合は、目に見えている年中行事も重要だが、目に見えないけれども京都人がやっている年中行事も大事。京都に住んでいる人たちを見ると、おじいちゃん、おばあちゃんたちも含めて、昔から季節の移ろいによって日常生活の中で普通に行っている行事というのが何かあるのではないかと思う。多分次の世代になかなか伝わりにくい。表面に見えているものは伝わりやすいし、行政も関与できる。でも、行政が関与するところではない、この季節の移ろいの非常にきちった京都の生活の中で伝えている、生活の年中行事。これはなかなかここには出てこない気はするが、本当はそのあたりを残して行ってほしい。

鈴鹿委員：いわゆるインスタ映えしない、地味だけれども京都の人が自然にしている、年中行事とすら思っていないけれども、年中行事であるようなことが出てきたらおもしろい。

山路副委員長：おもしろいが難しい。もう少し高齢者の方に聞かないといけない。

(同業者同士の結びつきと行事の関係について)

太田委員：「選定にあたって」の文章の真ん中あたりで、「とりわけ千年の都・京都では、公家、武家、僧侶と庶民が交わった歴史が長く、加えて同業者同士のつながりが密接」とあるが、これは年中行事が生きている部分として結構大事なことなので、もう少し文言を足した方がいいと思う。例えば、お火焚きであれば火を使う職業の人たちの間で根強く残っているということ。工業都市・京都として長い歴史の中で、例えば、堀川あたりだと染めもの屋エリア、材木屋エリアとか、二条が薬屋、夷川が家具屋…というように、もう少し分かりやすい前言があればいい。

(勅祭と民衆の祭りについて)

太田委員：神社のお祭りなどについてだいぶ整理されたが、葵祭と新嘗祭を並べていいのかと少し違和感がある。葵祭は、賀茂祭と言うより葵祭と言った方がいいだろうが、勅祭。京都の祭りの

中で勅祭と民衆の祭り，例えば，天満宮は北野祭とずいき祭りの区別を一生懸命しているところ。八坂神社と北野天満宮の祭りは京都のランドマーク的都市の祭りであるが，勅祭とそうではないものは別々に扱う必要があるのではないか。また，新嘗祭はどう捉えたらいいのか。これはどこの神社でもやるが，天皇家でもやっている。公私分けが要るのではないか。

山路副委員長：北野祭は神輿も出る。それに対して，京都の西京の決まった人たちが取れた野菜類を奉納したのがずいき祭。その奉納の仕方が，普通にただ三方に入れて奉納するのでは芸がないというので，風流の作り物として，取れた野菜で神輿の形を作って奉納した。それがずいき神輿の始まり。5月5日に菖蒲神輿というものを宮中では作っていて，菖蒲の葉っぱを神輿の格好のように組み立てて持って行く。北野天満宮では，農民たちが，同じように自分たちが取った野菜で神輿を作るが，御旅所までしか行っていない。本殿には行かないと思う。

太田委員：申し上げたいのは，勅祭としての葵祭と新嘗祭が並ぶのがややこしくて，勅祭としての北野祭と賀茂祭は並ぶものと考えていいという文言があってもいいということ。

(暮らしの変化と行事の日程の変化について)

太田委員：地蔵盆についてだが，資料の中で「暮らしの中で社会の変化によって，年中行事の有り様が大きく影響を受けて変わってきた」ということが，衰退・簡略化と書いているのであれば，地蔵盆はもともとは地蔵吉縁日に行う行事であって，私たちが子供の時は8月23, 24日しかしていなかった。しかし社会の変化，親の仕事の変化で土日が変わってきたものであるから，選定文を8月中旬から下旬にかけてと書いておくのは間違った認識。

山路副委員長：その日しかやらないというのが京都の文化の特色。だから，祇園祭でも何でも，その時に行かなければ見られない。お菓子にしても，これまでは絶対に期日限定の物。それが京都の文化。ところが，この頃はよそから来た人がいつでも買いたくなるから，それに合わせて少し長い間売ってしまっている。それが地方から人が来る，観光都市・京都としての文化の崩れ。結局，そうやって水無月がいつでも買えたり，少し早めに出したり。大文字があの日15分間しか見られないというのが京都限定の京都の文化の特色。どんどん皆さんにサービスしてしまって，崩れてしまっている。それが非常に残念だ。

京都の年中行事で何が重要かということになるべく強調しながら，それを守っていくということ。そうすると観光と相反することになるが，それが京都の矜持だった。

鈴鹿委員：その意見に賛成である。確かに，本当はこの日だけというのが大事だと思うし，この日の物というのが大切だと思う。ただ，続けていくとなると少しずつ変わっていつていることもある。例えば，夏越の祓の水無月。今年6月の最後の日は出張で京都を離れなければならな

った。でも、夏越の祓ができないのは残念だなと思ったときに、水無月が前日や6月の最後の1週間くらいだけでもお店にあると有り難い。6月初めなどは論外ですが、本来の日からは少しずれてしまうけれども、夏を迎えるのに気持ち悪いな、という人が続けられる。きっちりその日だけとしてしまうとその余地がなくなってしまう。今の仕事の形態などで考えてみると、選挙の期日前投票と同じように、本当はこの日にするのは分かっているし、この日にしたいけれども、どうしても仕事で抜けられない方が年中行事を守れなくなって、特に若い方は1年抜けると「もう来年からいいや、別になくてもいいや」となってしまう。そのため余地があるというのは、今の社会では大事だと思う。

地蔵盆にしても、確かに日は守りたいけれども、どうしても休みが取れないからこの日にするというのはあってもいいと思う。ただ、この年中行事のことを文章として京都市から出すとしたら、「本来はこの日で、こういうものですよ」というところは絶対欠かしてはいけない。いま、生活の中でどうしても少し揺らいでしまっているのは、それも一つの生活様式に合わせての工夫として容認するにして「本来はこの時だったのですよ」というのはどこかに書かなければいけないのではないかと思う。

山路副委員長：決まったその日に意味があるということはみんな分かっているけど、京都の年中行事がその日に行われる意味を分かっている。

鈴鹿委員：送り火の日程などは変えてはいけない行事だが、東京の方に「第何曜日にやるのか」と聞かれる。また祇園祭も「雨だったら延期になるのか」と聞かれる。そういう所はきっちりここで明記した方がいいのではないか。

山路副委員長：時代祭は1日延期する。今年は両日ともできなかった。

鈴鹿委員：時代祭は延期することもあるけど、鞍馬の火祭はやった。

柿野委員長：宗教行事はその日に行う。雨が降ろうがその日にやらざるを得ない。

去年は五山送り火が土砂降りの中実施された。

(年中行事と食べ物について)

太田委員：例えば、年末になると京都の店舗には雑煮を作るための白みそや丸餅が並ぶが、白みそや丸餅は関西一円にある。京都の雑煮として特徴的なものでは、エビ芋がある。それを併記しておいた方が、京都の雑煮だと感じる。また「6月には菓子屋の店頭の水無月が」とあるが、次に夏越の祓が出てきますから、「6月30日には菓子屋の店頭には水無月が」と書かなければいけない。水無月もそうだが、私が菓子屋さんをやっていた時に意識していたのは、行事と結びつきの強いお菓子はその日に作らないといけないということ。年中行事と通過儀礼を表現してい

るのは、案外お菓子屋さん。京都の町の中で、様式的に言えば。例えばお火焚きは、お火焚きまんじゅうとおこしとみかんをセットでくれるというすごく重要な行事である。

月見どろぼうという行事が市内ではないですが、京都の南の方ではある。お菓子屋さんは「常は出ません、当日限り」など、年中行事の表現力が一般市民の中では結構高いですから。

杉本委員：我が家では決まったお斎（とき）の献立がある。親鸞さんとの関係のある日、例えば親鸞聖人のお誕生日に、親鸞さんは小豆が好きだったと伝わっているため日々のケのお食事として小豆の入ったおつゆをいただく。小豆は邪気払いの意味がある。今は正月の一般家庭の食材にもあまり挙がっていないが、我が家では15日に小豆粥を食べる。三が日があって、7日の七草粥、15日の小豆粥。その他ことあるごとに小豆が食卓に出て、たいていは小豆餅である。それが京都特有なのかは分からない。

山路副委員長：そういうものを伝えていきたい。派手なものだけを取り上げていると、沈んだところにある京都の文化が崩れてしまう。

太田委員：親鸞ゆかりの行事は、浄土真宗。例えば日蓮宗のお宅では、おはぎを作る率が他の宗派よりとびぬけて高い。それは日蓮が龍ノ口で斬られかけたときに、比企家の尼さんが屯食というおにぎりを持って走ってこけ、泥まみれのおにぎりを日蓮が口にしたことから、日蓮宗ではホーリーフードになっている。親鸞が木野目峠を越えて佐渡に行くとき、命をつないだのが小豆。そのため浄土真宗では、親鸞の愛したものとして尊ばれている。それから、通過儀礼にはなるが、真言宗高野山派だけは四十九日に、お坊さんが餅を人の形に切り、それを逆落としとって、坂から投げに行く。

杉本委員：小豆粥は浄土真宗に限ったことではないように思う。

山路副委員長：小正月に食べるのは全国的なもの。

太田委員：京都の北の人間はあまりしない。小豆はあまり使わない。下京の方は多いような気がする。それから、京都の丹後、丹後半島、大宮から久美浜の間では、正月に雑煮ではなく全てぜんざい。昔は塩だったと思う。小豆は全てのベースにあると思うが、宗派や氏神氏子の関係性もあるだろう。

（行事の例について）

太田委員：お稽古されている所にごあいさつに行く八朔が入っていない。

山路副委員長：基本的には武家の行事で、普段お世話になっている者が世話をしてくれる人の所にお礼に行くというのが八朔。

太田委員：八朔が過ぎてから立秋までの間に中元のごあいさつに行く。デパートなどでは6、7月に中

元の品が出ている。八朔は頼みの軸を掛けて、ごあいさつを受けてお餅をくれるというもの。  
これがどこまで一般的な京都の習慣か分からないが。

山路副委員長：本当は農民たちが初穂，買ったものを神社に持っていく。だから，「田の実」で「頼み」  
に変化した，それに対して，もらうほうは扇1本か半紙1帖でいい。

太田委員：事始めが挙がっていたら，八朔は入っていてもいいのではないかな。夏と冬の対照的なもの。

山路副委員長：結局，暮れの事始めはお歳暮になってしまっていて，お歳暮はもらった返すものだと思っ  
ているが，本当はもらったお返しはそこそこで，今で言うとはがき10枚。僕らの時代だと，  
返すのはくみ取り券を10枚です。もらう方は，昔だと白扇1本でいい。お世話になっている  
人がお礼に行くというのが基本。

それから，気になったのがお火焚き。お火焚きというのは，基本的には太陽の光が一番弱  
い頃に行く。太陽がそのまま光が弱くなってなくなってしまうのではないかとということで，  
太陽のエネルギー＝天皇の生命力と考え，火を焚いて太陽の復活を願うというので，基本的  
には冬至の日。昔は冬至というものがあまりよく分かっていなかったのだから，旧暦11月の遅  
い頃にお火焚きをするというものだった。それが京都や他の所では，火を使う業者のお祭り，  
神社でやる場合はお祭りということになっており，伏見稲荷大社あたりだともものすごくも  
うけ時になってしまっている。基本的には町々で，日にちは分からないけれども太陽の光が一  
番弱くなったときに太陽の光の復活を願ってするのがお火焚きであって，一覧表のお火焚き  
は五穀豊穰を祈ると書いてあるが，そうではない。感謝するというのも違う。

（祝日の変化について）

鈴鹿委員：一覧表に運動会なども入っているのだから，祝日が変わってしまったということを取り上げるべ  
きではないか。また成人式は元々，元服の儀の日で意味があった。祝日が変わったというこ  
とを問題視している人は多い。体育の日も元々は東京オリンピックの開会式である10月10  
日だった。この日は東京都において何十年間の統計により，一番晴れの日が多い日であった  
ためである。このように本来はこの日だということが盛り込めたらよいのではないかな。祝日  
が変わってしまったことで，その意味が消えてしまっている。

山路副委員長：祝日を変えたというのは日本文化をぶち壊すような話。新しい行事というのは決まった  
日にやる。ハロウィンやバレンタインデーも，みんな日にちを1週間ずらそう，少し長くや  
らうと思わない。新しい行事はその日に割合まだ肯定する。古くなってくると，もう少し時  
間を足そうなどとなる。

(二十四節気に関する行事について)

筑摩委員：二十四節気の項目が少なくて寂しい。小学校の勉強に出てくる。子どもから「これは何？」と聞かれても説明できないことがあったり、身近にないことがあったりする。

山路副委員長：二十四節気というのは、町というより、どちらかというところと農村生活の区切り。地方に行くともものすごく重要で、二百十日、茶摘みなどは全て節分から数えて決まっているが、都会生活の中に二十四節気にまつわるものはあまりない。

北村局長：冬至にかぼちゃを食べる以外はなさそうだ。

太田委員：お菓子を作る上で一番大切にしているのは、二十四節気よりも七十二候。ほぼ4日おきに色を変えるので、菓子屋は七十二候が頭に入っている。その時々で餡の砂糖の量も変える。また、それで銘(めい)をつけなければいけない。二十四節気については、料理屋さん、食べ物屋さんなどが少し意識するくらいではないか。基本的に農業のカレンダーである。

(通過儀礼と年中行事の違いについて)

太田委員：京都だけの特徴的な年中行事の説明をもう少ししっかり記載してほしい。例えば、十三まいは京都及び北摂のみである。子供のとき、十三まいで初めて振袖を作ってもらって、袖を上げて、二十歳で下ろすというのが、京都の女性の皆さんが経験されていたこと。「どこで振り返った」などの話をしていたと思う。「いわを」さんの天ぷらうどんを食べて十三まいをし、京福電車に乗って帰るとというのが、これこそまさに年中行事。これはもっとクローズアップしてほしい。

杉本委員：十三まいりのお話を聞いていて気がついたが、この「子供の健やかな成長を祈る」は年中行事なのか。通過儀礼行事ではないか。成人式を毎年するわけではなく、人生で1度きりのこと。家庭で毎年することではない。通過儀礼も含むというような文言があればよい。

鈴鹿委員：項目を少し分けたらよいのではないか。

杉本委員：通過儀礼というのでしたら、お宮参りを入れてもいいのではないか。

山路副委員長：昔は子供が産まれてから30日を待たずに死んでしまうことが多かった。30日ぐらいたって、これからも生きていけるなと思ったころ、この子が新しい氏子として入りますよと氏神様にご挨拶に行くことがお宮参りである。だから、自分の氏神様に行かないと意味がない。京都の場合は平安神宮を造り、京都全体の氏神様だということにした。だから平安神宮に行くのはいいが、最近は「お稲荷さんに行こう」などと氏神でないところに行っている。お宮参りの本当の意味を知らず、ただお宮に参ればよいと思っている。

杉本委員：お宮参りは全国でしているのですが、「京都の」というくくりは外さないといけなくなるのか。

柿野委員長：そうすると、成人式も外すことになってしまう。

太田委員：成人式は日が決まっているが、お宮参りは産まれた日にもとづくもの。七五三は11月、十三まいは4月、成人式は1月、地蔵盆は8月だが、お宮参りは産まれた日で変わるから、ここには入らないのではないか。通過儀礼でも月日が決まっているものは、「京都の年中行事」としてもいいのではないか。

子どもの頃、七五三の時に頭に餅を載せられた。男の子は3歳で餅を頭に乗せる。これは引千切（ひちぎり）の元かと考えている。『御堂関白記』などに載っているが、特殊な行事である。

もう一つ京都らしいことかというと、愛宕神社の千日詣りがあり、子どもが3歳になるまでに連れていったら、その子は生涯火事に遭わないというもの。

（家々での年中行事、注意点について）

杉本委員：行事を伝えるときに大事なことは家々での違いがあるということ。各家庭の独特の考え方、ポリシーがあるので、年々の行いにはそれぞれにあると考える。これが印刷物になって広めることによって、宗教的にしなくてもいいことまでするようになることもあるかもしれない。これが京都の年中行事だと書いてあるからやっついこうかという人も出てくるかもしれない。

柿野委員長：マニュアル化された京都人のような感じ。

杉本委員：この冊子に載っている行事はあくまで一例です、ということを強調すべき。

鈴鹿委員：お雑煮の具のことで、「京都ではこれとこれを入れるんです」と言われると、「いや、私のところはおくるみを入れる」ということがあるように、各家庭によってことなるもの。「こういうところもあればこういうところもあり、各家庭によって伝わっているそれぞれのお雑煮を食べます」というような文言があってもいいのではないか。

山路副委員長：同じ京都でもいろいろな人がいるわけで、必ずいろいろなものがある。とりあえずそれを代表してまとめようというのが今回の意図。もちろん弊害はあるし、家庭によっても違う。だから、「京都の」と言っても難しい。基本的に文化には、個々の歴史の要素が絡んでくる。

（年中行事を伝える、受け継いでいく意図について）

若村委員：その家の次の代、次の代で受け継ごうとしても本当に元々の意図が今は分からなくなっている。子供ができて行事を伝えようとしたときに、かたちは分かっても、どうしてこれを行っているのかなと意味の分からないことが出てくると、伝えにくくなり、やらなくなっていく。一番いいのは、今、皆さんが発言しているとおり、どういう意味を持ってこの年中行事をや

ってきたのか、なぜこういうお飾りをするのかなど、見えるものの後ろ側にある想いが伝わると、「今までやっていなかったけれども、やってみようかな」と、受け継いでいく動機付けになる。

杉本委員：子供目線に立つと分かりやすくなるかも。子供は何に対しても「なんで」と言う。それに答えられるように作れば分かりやすくなる。例えば雑煮でも「なんで京都は丸餅なん」「白いお味噌なん」という風に。

(その他の行事について)

柿野委員長：区民運動会が出てくるが、これはいつごろできたのか。

伊藤担当課長：文献からみて、50年くらいは経っている。

山路副委員長：京都の人は明治に学区をつくり、学区ごとに一つの共同体ができたのかもしれない。

杉本委員：それは戦時中の名残ではないのか。戦時中にバケツリレーをする、それに対応するために小学校で区切れられた学区が、市民をまとめるのによかったのでは。

山路副委員長：学区は共同体として明治から広く使われている。時代祭でも何でも、

あれは学区ごと。学区というのは近代の京都の人にとって基本である。

柿野委員長：新しい市民が生み出した年中行事と言える。今はそれが高齢化もあるが、廃れつつある。

山路副委員長：それがなぜ成立しているかというのも少し加えてほしい。

太田委員：幸在祭（さんやれさい）という15歳の男子を対象とした元服の儀式がある。2月に行われており「おめでとうござる」と節をつけて囃し立て、鉦太鼓や笛を鳴らしながら上賀茂神社から太田神社まで練り歩く通過儀礼の行事である。

鈴鹿委員：五大力は入らないのか。あれは一部の地域だけなのか。

北村局長：年中行事は、寺院、神社で行われる祭礼や行事のものと、市民の皆さんがそれぞれ自分の暮らしの中にあるものがある。今回冊子に掲載するものは単に見学に行くことではなく、まちの様子としてあるものを掲載するべきではないかと先日事務局内でも議論をした。再度議論を深めたい。

杉本委員：僧侶の方々が托鉢で辻々を歩いているのはどうか、年中歩いているが京都特有で生活の身近な音、暮らしの音だと思う。特に年末に歩かれている。

太田委員：12月に鉢叩きなどはしないか。

鈴鹿委員：いろいろ出てきたので、陶器市などは入らないのか。

柿野委員長：下鴨の古本市も入れてはどうか。

山路副委員長：江戸時代から続いている縁日の市。古本市だ、何々市だというのは新しい。

太田委員：大根炊きはどうか。鳴滝と千本釈迦堂でやっている。

鈴鹿委員：献茶祭が入っていて、献菓祭は入れなくていいのか。平安神宮の献菓祭には全国からお菓子が集まる。

太田委員：献菓祭は平安神宮ができたころからある。

山路副委員長：菓子の神社といえば山蔭神社では。

鈴鹿委員：菓子は田道間守（たじまもり）が、吉田神社の中にある。

山路副委員長：年中行事としては、もう少し市民に根付いているものがよいのではないか。

太田委員：12月1日の北野献茶が明治13年に始まった最初の献茶で、歴史的に意義のあるもの。4家元2宗匠が輪番で6年おきに神前にお茶を供えている。八坂神社では戦後に始まったが、表千家と裏千家が交互にやっている。

それから洛趣会、この会は京都市民を巻き込んでいると思う。

鈴鹿委員：洛趣会は5年に1回の開催で、クローズな会で、招待客しか入れない。

太田委員：毎年数千人規模での開催であるので、京都の人はほぼ行っているのではないか。先ほどの献茶祭も洛趣会もチケットを初めて手に入れたときに、京都人になったかなという感覚のもの。

杉本委員：献茶というと、お抹茶寄りのイメージがあるが、お茶には煎茶もある。

柿野委員長：高山寺がお茶の発祥の地。

太田委員：多くの市民が参加する年中行事であれば、茶壺はどうか。

山路副委員長：それは宇治。お茶会というと、やはり四つ頭の茶会。

柿野委員長：「都をどり」などの花街の踊りが入っていない。

山路副委員長：年末の南座の顔見世もある。

太田委員：昔、素人顔見世というのが京都市民の間で行われていた。私も出演したが、1カ月、中村勘九郎に稽古をつけられた。京都市民にとって顔見世は重要。

土橋部長：冊子には、これまで選んできた5つの選定も含めて、こういう時期にはこういうものがあるというのは入れたいと考えている。しかし、風物詩まで入れてしまうのは果たしてどうなのかと考える。どちらかという市民の方が行動を起こすようなものを、核にしたほうがいい。

北村局長：薪能なども定着してきている。

鈴鹿委員：それなら壬生狂言もある。

北村局長：京都観光のカレンダーみたいになったら分からないことになってしまう。線引きは難しい。

柿野委員長：本日いただいたご意見を事務局で取りまとめていただく。

ありがとうございました。

(終了)

## 「京の年中行事」に関するアンケート

京都には、世代を越えて暮らしの中で伝えられてきた数多くの無形文化遺産があります。それらの価値を再発見、再認識し、大切に引き継いでいこうという気運を盛り上げるため、平成25年4月、京都市独自の仕組み“京都をつなぐ無形文化遺産”制度を創設し、これまでに「京の食文化」、「京・花街の文化」、「京の地蔵盆」、「京のきもの文化」、「京の菓子文化」の5件を選定しました。

この度、季節感を実感でき、家族や地域のつながりを深める重要な役割を果たしてきた「京の年中行事」を6件目の選定対象として検討することとしました。

ついては、市民の皆様の暮らしの中の年中行事について、以下のアンケートを実施しますので、御協力よろしくお願ひ申し上げます。

### ◆ 募集期間

平成29年6月5日(月)～平成29年8月31日(木)【必着】

### ◆ 応募方法

郵送、ファックス又は電子メールにより応募してください。

京都をつなぐ無形文化遺産ホームページ (kyo-tsunagu.net) から御応募いただけます。

なお、提出いただいた書類は返却いたしませんので、御了承願ひます。



### ◆ 御意見の取扱い

この意見募集で収集した個人情報につきましては、「京都市個人情報保護条例」に基づき適切に取り扱い、他の目的に利用することは一切ありません。

なお、御意見に対する個別の回答はいたしませんので、あらかじめ御了承願ひます。

### ◆ 問合せ先及び応募先

〒604-8006

京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394番地 Y・J・Kビル2階

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

電話：(075) 366-1498 / FAX：(075) 213-3366

電子メール：bunka-hogo@city.kyoto.lg.jp



京都市  
CITY OF KYOTO



**年中行事**とは、毎年特定の時期に家庭や地域等で行われる行事です。年中行事を行う日は「ハレの日」と呼び、日常である「ケの日」と分けて、一年の暮らしの中にリズムをつくってきました。

<年中行事の例>

正月、七草、初午、節分、上巳の節句（雛祭り）、端午の節句、夏越、七夕、お盆、地藏盆、十五夜、亥の子、七五三、年越し、祭り、二十四節気など

以下について、御記入ください。

(1) あなたが大切にしたい、家庭や地域で引き継がれてきた「年中行事」を教えてください。

行事名	どういったことを行いますか？
(例) 正月	白味噌丸餅のお雑煮を食べる。

(2) 「年中行事」を大切だと思う理由であてはまるものに「○」をつけてください。(複数可)

- a 伝統や風習を大切にしたいから
- b 季節を感じられるから
- c 暮らしにメリハリがつくから
- d 祈願や感謝等の行事の意義が大切だから
- e 地域の結びつきを深めるから
- f 親族や友人が集まる機会になるから
- g 行事特有の食文化等もあるから
- h 地域への愛着や誇りを育むから
- i 特に理由はないが慣習なので
- j その他

[ ]

(3) 「年中行事」を継承していくための普及啓発のアイデア、その他御意見等を自由に御記入ください。

まとめる際の参考としますので、差し支えなければ当てはまる項目に○を御記入ください。

【性別】 男性 女性

【年齢】 20歳未満 20歳代 30歳代 40歳代  
50歳代 60歳代 70歳以上

【お住まい等】 京都市在住 京都市通勤・通学（京都市在住除く） その他

## 市民への年中行事アンケートの結果

### 1 市民アンケートの概要

#### (1) 募集期間

平成29年6月5日（月）～平成29年8月31日（木）

#### (2) アンケート数等

アンケート数：764人，意見数：3,977件

#### (3) アンケートに答えていただいた方の属性

##### ア 居住地等（人）

京都市在住	京都市通勤・通学	その他	不明	合計
692	38	13	21	764

##### イ 年齢（人）

20歳未満	20代	30代	40代	50代	60代	70歳以上	不明	合計
65	172	119	139	115	105	35	14	764

##### ウ 性別（人）

男性	女性	不明	合計
338	413	13	764

### 2 市民アンケートの内容

Q1 あなたが大切にしたい、家庭や地域で引き継がれてきた「年中行事」を教えてください。

行事等	件数	主な行動等
正月（初詣）	440	初詣に行く，白味噌丸餅の雑煮を食べる，おせち料理を食べる，家族で集まる，お年玉をもらう，書初めをする，鏡餅を供える，門松・生け花・しめ縄飾り・松飾りを飾る，神棚にお札をまつる，神棚に手を合わせる，仏前にお参りする，鏡開きをする，
盆	154	先祖を偲ぶ，御精霊さんを迎える・送る，墓参りをする，家族・親戚で集まる，迎え鐘をつく，
節分	140	太巻き（恵方巻き）・鯛を食べる，豆まき，お札を納める
大晦日（年越し）	135	年越しそばを食べる，除夜の鐘を聴く，をけら詣りに行く，大掃除をする
地藏盆	100	町内行事として参加する，地藏を飾る，数珠回し・ふごおろし・ゲームをする，お菓子をもらう，
上巳の節句（桃の節句，ひな祭り）	60	ひな人形を飾る，桃の枝を供える，ちらし寿司を食べる，ひなあられを食べる
七草	53	七草粥を食べる
夏越の祓	53	水無月を食べる，茅の輪くぐり，鱧・芋茎を食べる
祭り	42	地域や氏神の祭りに参加する，屋台で食べる，ゲームをする，浴衣を着る
祇園祭	41	巡行・鉦を見物する，浴衣を着て宵山に行く，粽を飾る

端午の節句 (子供の日)	27	兜飾り・大将人形・白馬などを飾る，柏餅・粽を食べる 鯉のぼりを立てる
七夕	25	笹飾り，短冊に願い事を書く
クリスマス	23	ケーキ・鳥料理を食べる，プレゼントを贈る
五山送り火	16	送り火を見る
誕生日	16	ケーキを食べる，プレゼントを贈る・貰う，家族で集まる
冬至	10	柚子湯に入る，カボチャを食べる
土用の丑	9	ウナギを食べる
彼岸	8	墓参りをする
七五三	8	子の成長を祈願する
十五夜 (仲秋の名月)	7	月見をする，団子を食べる，すすき・秋の花を飾る
葵祭	6	鯖寿司を食べる，行列を見物する
小正月	5	小豆粥・ぜんざいを食べる
御手洗祭	5	下鴨神社で水に足をつける，みたらし団子を食べる
左義長 (どんど)	4	古くなったお札等を焚き上げる
運動会(学区 民体育祭)	3	運動会に参加する
四季折々	3	季節ごとの和菓子を食べる
花見	2	桜を見て楽しむ，宴会をする
二十四節気	2	見舞状を送る，季節にあったものを食べる
花まつり	2	花御堂を飾る，甘茶を飲む
海の日	2	海に行く
新年会	2	家族や友人と食事する
餅つき	2	餅をつく
その他	60 (各1)	事始め，御用始め，御用納め，亥の子餅，六道まいり，十三まいり，をけら詣り，お参り，本願寺お参り，平野神社お参り，神社参拝，やすらい祭り，梅花祭，春日祭り，一言寺祭，若宮(社)祭り，榎ノ宮祭礼，松尾大社の御旅所，晴明祭，今宮神社の祭，統一夏祭り，こどもみこし祭り，洛西ふれあいの里秋祭り，六斎念仏，能楽大連吟，獅子舞，東寺弘法市，醍醐市，いちろく市，新年互礼会，納涼床，ラジオ体操，母の日，敬老の日，きもの日，DO YOU KYOTO?デー，京都マラソン，京都学生祭典，結婚記念日，法事，茶道，通過儀礼，高齢者茶話会，焼肉会，親族への挨拶，花札，花火大会，夏始め，節句，夏至，初午，大寒，雨水，高田太鼓踊り，東灘だんじり祭り，水の祭典，鬼火炊き，亀岡祭，夜市，光秀祭
合計	1,465	

Q2 「年中行事」を大切だと思う理由であてはまるものに「○」をつけてください。

a	伝統や風習を大切にしたいから	4 4 9
b	季節を感じられるから	4 2 9
c	暮らしにメリハリがつくから	2 0 1
d	祈願や感謝等の行事の意義が大切だから	1 7 4
e	地域の結びつきを深めるから	1 2 2
f	親族や友人が集まる機会になるから	2 4 8
g	行事特有の食文化等もあるから	1 9 6
h	地域への愛着や誇りを育むから	1 2 0
i	特に理由はないが慣習なので	7 9
j	その他 (※)	2 0
合 計		2, 0 3 8

(※)「j その他」の御意見

- ・ 世の中、昔に比べて人付き合いが減っていると思います。家族や親戚が集まったり、人と交流する機会としても大事な時間だから。
- ・ みんな何かしら行事に関することをやっていて、やらない方がおかしいと思ってしまう。
- ・ 家族が代々受け継いできたから
- ・ 子供たちに伝えていくから
- ・ 家族への感謝のために
- ・ 家族の絆を感じる
- ・ 楽しいから
- ・ ない。あるのが羨ましい
- ・ 特に大切だとは思っていない
- ・ 特別に行う事はない
- ・ 行事を気にしない
- ・ 当然のように息をしている感覚で執り行える行事であってほしい
- ・ 家族の無病息災を祈る
- ・ 文化の継承

Q3 「年中行事」を継承していくための普及啓発のアイデア，その他の御意見等を自由に御記入ください。

- ・ イベントを実施する
- ・ 行事に詳しい高齢者の話を聞く
- ・ 参加しやすい雰囲気づくり
- ・ TV・CM等のメディアを活用して発信する
- ・ SNSを活用して発信する
- ・ スーパーで行事食を販売する
- ・ 職場，学校で啓蒙する
- ・ 古いしきたりだけでなく新しい楽しみ方を常に取り入れる
- ・ 小学校の給食で出したり，授業に取り入れたりする
- ・ 特別休暇を設定する
- ・ 地域コミュニティの強化，行事の本当の意義を知る機会を持つ
- ・ 出来る範囲で実行していく
- ・ 現代の暮らしに取り入れやすいかたちにする
- ・ 冊子や掲示など目につく形でまずは知ってもらうことが必要
- ・ 子どもたちに習慣として身に付けさせる
- ・ 体験させる
- ・ 伝統を守るのがカッコイイという空気をつくる
- ・ 地元企業、商店街、商業施設との提携やイベントの実施
- ・ 1，2人分など少量で行事用の食べ物を売る
- ・ 年中行事を紹介するVTRを作成する
- ・ 有職故実を簡単に解き明かした勉強会の開催
- ・ アプリでお知らせする
- ・ 年中行事のパズルやカルタを作る
- ・ 行事のスケジュール帳等を地域に配る
- ・ 堅苦しく華やかではないイメージのため，現代向けにもわかりやすく楽しいイメージを定着させるべき（幼児向けに漫画で解説する）
- ・ 担い手の高齢化，人手不足が深刻であるため学生の参加・協力を求めていくべき